

農業技術情報

令和4年8月1日
ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
J A 幕別町	0155- 54-4118
J A さつない	56-2131
J A 帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

各作物の生育・作業の遅速（幕別町8月1日）

（ ）内は平年値（※春まき小麦は暫定）

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早3	収穫始 7/24(7/25) 収穫期 7/ (7/29) 収穫終 7/29 (8/2)	成熟期 7/19(7/22)
春まき小麦 (はるきらり)	早4	稈長 94.9 (83.3) cm 穂長 7.6 (8.1) cm 穂数 736 (725) 本/m ²	成熟期 7/31 (8/4)
馬鈴しょ	早2	茎長 72.6(71.9) cm 茎数 4.0(3.9)本	終花期 7/18(7/19)
大豆	早2	茎長 78.2(68.6) cm 葉数 9.6(9.1)枚	開花始 7/17(7/18) 開花期 7/20(7/21)
小豆	早4	茎長 25.8(26.0) cm 葉数 8.6(8.8)枚	開花始 7/23(7/27) 開花期 7/26(7/30)
菜豆 (金時)	±0	茎長 56.2(53.2) cm 葉数 4.1(4.1)枚 着莢数 78.3(98.4)個/m ²	開花期 7/15(7/15)
てん菜(移植)	早3	草丈 69.5(63.1) cm 葉数 26.0(26.1)枚 根周 30.3(29.5) cm	
てん菜(直播)	早4	草丈 63.8 (53.1) cm 葉数 22.3 (22.9) 枚 根周 22.9 (20.4) cm	
牧草	±0	草丈 60.4(59.4) cm	収穫終 7/24(7/11)
飼料用とうもろこし	早1	草丈 259.1(257.5) cm 葉数 16.8(16.7)枚	雄薬抽出期 7/26(7/27) 絹糸抽出期 7/29(7/30)
ながいも(マルチ)	早4	種子重 57.9(46.7) g 茎葉重 257.3(246.8) g いも長 36.8(34.4) cm いも重 130.0(80.9) g いも径 30.8(28.7) mm	
たまねぎ	早8	葉数 8.2(8.6)枚 葉鞘径 22.4(23.2) mm 球径 6.42(6.13) cm	肥大期 7/15(7/15) 倒伏期 7/31 (8/8)

畑作

<小麦>

「きたほなみ」の成熟期は平年比で3日早く迎え、収穫作業は平年より早く終了見込みです。「はるきらり」は成熟期を7/31に迎えました。収穫後のほ場管理を適切に行ないましょう。

1 収穫後のほ場管理

(1) 麦稈の処理

ア 収穫後の麦稈は速やかに搬出しましょう。

イ 特に、立枯病など土壌病害が発生したほ場では、病気のまん延を防ぐため、麦稈をすき込まずに持ち出し、堆肥化しましょう。また、2～3年は麦の作付けを避けましょう。

ウ 麦稈をすき込む場合は、窒素流亡による環境負荷を低減するため、後作に作物や緑肥を栽培する場合を除き、窒素肥料の施用を避けましょう。

エ そば・麦異品種の後作に麦の作付は避けてください。やむを得ず作付けする場合は、麦稈を搬出しロータリーをかけ、出芽した後に、プラウで埋設して下さい。

(2) 多年生雑草対策

シバムギ・レッドトップ・ギシギシなど多年生雑草が多い小麦畑が散見されます。多年生雑草対策には耕起前の除草剤茎葉処理が有効です。

【多年生雑草の処理方法（グリホサート系除草剤）】

小麦収穫 → 雑草が 15cm 以上に再生 → 除草剤散布 → 耕起

※少水量散布時は専用ノズルを使用する。

※通常 2～7 日で効果が発現し、効果完成までさらに日数を要します。

表 1 耕起前の除草剤例

農薬名	処理方法・使用時期	薬量 (ml/10a)	回数	注意事項
ラウンドアップ マックスロード	耕起前・雑草生育期 水量 25～100ℓ	200～500	3 回	・多年生雑草が 15cm 以上再生後に散布。 ・展着剤を加用しない。
タッチダウン iQ	通常散布、耕起 3 日以前 (雑草生育期)	500～750	1 回	・散布後 6 時間は降雨がない日に散布。(ラウンドアップマックスロードは 1 時間、タッチダウン iQ は 3 時間)
	少水量散布(水量 25～50ℓ) 耕起 3 日以前(雑草生育期)			
サンダーボルト 007	耕起前 (雑草生育期)	500～ 1,000	2 回	・周辺作物に飛散しないよう注意するとともにドリフト低減ノズルの使用が望ましい。
クサトリキング	耕起前まで 雑草生育期草丈 30cm まで	250～500	3 回	・少水量散布は専用ノズルを使用。

(3) 収穫跡地の後作緑肥作付

地力の維持増進のため、小麦収穫跡地には緑肥作物を作付けしましょう。後作にながいも・ごぼうなどを作付けする場合は、キタネグサレセンチュウ対策のため、えん麦野生種が有効です。えん麦野生種には、ばれいしょのそうか病軽減効果や小豆落葉病の抑制効果もあります。表 2 を参考に、ほ場の条件に応じた緑肥を選定しましょう。

表 2 小麦後作緑肥の栽培例（北海道緑肥作物等栽培指針）

緑肥作物名	は種時期	は種量 (kg/10a)	施肥量(kg/10a)			すき込み 時期
			窒素	リン酸	カリ	
えん麦(一般)	8 月上～中旬	15～20	4～6	5～10	0～5	10 月 中旬 ～ 10 月 下旬
えん麦野生種(ハイオーツ、サイヤー)		10～20	5	5	0～5	
シロカラシ類(キカラシ)※1、2	8 月上～下旬	2	5～8	5～10	0～7	
ひまわり(りん蔵)※2	8 月上～下旬	1.5～2	4～6	8～10	0～10	

※1・そうか病発生ほ場では前作として用いない。

・根こぶ病発生の恐れがあるので、前作又は後作にアブラナ科野菜の作付けはしない。

※2・キタネコブセンチュウやキタネグサレセンチュウの密度を高めるので、後作物の選定に注意する。

<てん菜>

高温多湿条件が続き、褐斑病や根腐病の発生が見られています。ヨトウガの食害も見られています。ほ場を良く観察し病害虫の発生に応じた適期防除に努めてください。

1 褐斑病の防除

ほ場の発病状況を確認し発生初期には遅れずに防除しましょう。

表3 褐斑病防除例

防除時期	農薬名	RACコード	薬剤特性	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)	葉腐病(登録)	
8月上旬	① どさんこスター水和剤	3 M3	予治	500	21日	①	4回	① ○
	②					② ×		
	③					2回	③ ○	

※マンゼブ(RACコード:M3)を含む剤の総使用回数は5回まで

2 ヨトウガの防除

ヨトウガは幼虫が大きくなるにつれて薬剤の効果が低減しますので、食害を確認したら速やかに防除しましょう。

表4 害虫防除例

防除時期	対象害虫	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
8月上旬	ヨトウガ	カスケード乳剤	15	4,000	7日	4回

※カスケード乳剤は、ハダニ・アシグロハマグリバエ・シロオビノメイガにも効果があります。

3 葉腐病(根腐病)の防除

葉腐病・根腐病は既に発生が見られています。葉腐病は高温多湿条件で多発します。連作畑や根腐病発生ほ場では発生のリスクが高まるので、発生が見られたら8月中旬の防除時に以下を参考に同時防除を行ってください。

表5 葉腐病の防除薬剤例

防除時期	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
8月中旬	モンカットフロアブル 40	7	1,000	14日	4回
8月中旬	リンバー顆粒水和剤	7	4,000	7日	3回

<馬鈴しょ>

高温多湿気象が続いた影響で茎葉黄変が早まるほ場が見られています。また、夏疫病や菌核病等の発生も見られますので、できるだけ茎葉を保持するため防除に努めてください。今後、早生品種は茎葉枯凋が進んでいく時期なので、塊茎の肥大状況を確認し茎葉処理の準備をしましょう。

1 疫病の防除

現在発生は多くはありませんが、今後も計画的に収穫までの日数を考慮して薬剤を選択し、防除を実施してください。* 薬剤は7/20付技術情報参照

2 軟腐病の防除

高温多湿条件が続いたため、軟腐病が発生しています。強風や機械作業等で傷んだ茎葉の傷口から感染しやすいので薬剤防除を実施しましょう。また、生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

表6 軟腐病の防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)	効果の発現
銅ストマイ水和剤	25, M1	600~800	7日	5回	予治
カスミンボルドー	24, M1	500~800	7日	3回	予治

※ローテーション防除の実施に努めましょう

※ストレプトマイシンを含む剤の使用回数は合計5回まで

※カスガマイシンを含む剤の使用回数は合計3回まで

3 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの防除

まだ収穫まで間がある中晩生種を中心に、害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。* 薬剤の使用例は「6月17日付技術情報」を参照

4 茎葉処理

(1) 薬剤処理による方法

茎葉枯凋剤の散布は塊茎が目標の大きさに達した時期に晴天無風の日を選んで散布してください。

表7 茎葉枯凋処理剤

農薬名	使用量(ml /10a)	水量(l /10a)	使用時期	使用回数(以内)
デシカン乳剤	250~450	100	茎葉黄変始~収穫3日前まで	2回

※接触剤のため茎葉にまんべんなく薬剤を付着させる。

※茎葉黄変期前に使用した場合、枯凋が不完全になる場合がある。

※処理後2~3時間以内に、降雨が予想される場合には使用を避ける。

※生理的ストレスにより維管束褐変を生じやすいので、土壌が極端に乾燥しているときは使用を避ける。

※散布の際にはドリフトを起こさないように注意。

(2) リーフチョッパーによる方法

リーフチョッパーを使用する場合は以下の事に注意してください。

- ・茎葉処理作業は茎葉黄変期後の好天時に作業する。
- ・塊茎の損傷や緑化防止のため、刈取り高さは培土を崩さないよう地表から余裕をもたせて処理する。
- ・後部に石れきが飛散しやすく危険なので、周囲に人がいないことを確認後処理する。

<豆 類>

生育は順調ですが、豆類ごとの生育状況と病害虫の発生状況に注意し、適正防除に努めてください。

1 大豆べと病の防除

黒大豆で、開花前に要防除水準に達せず未防除の場合は開花期に1回の防除を行いましょう。* 薬剤は 7/20 付技術情報参照

2 大豆菌核病の防除

多湿条件で発病は多くなり、開花期前後に降雨が続くと多発します。開花始後 10～15 日目に 1 回目を実施し、2 回目以降は発生条件に応じ 10 日ごとに実施します。* 薬剤は 7/20 付技術情報参照

3 マメシクイガ・カメムシの防除(大豆)

1 回目防除の目安は、①成虫初発と②莢伸長始(およそ半分の株に2～3cmの莢が認められた日)両方が確認されたら、その6日後頃です。莢伸長始を観察し適期に防除しましょう。2 回目防除は1回目の7～10 日後に防除します。カメムシとの同時防除が可能です(表8)。

表8 マメシクイガ・カメムシの防除体系例

回目	目安月日	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
①	8月上旬	ゲットアウトWDG	3A	3,000	7日	3回
②	①の10日後	スミチオン乳剤	1B	1,000	21日	4回

※甲虫類(コガネムシ等)の食害が目立つ場合は、有機リン剤(スミチオン乳剤)を使用しましょう。

※1 回目または2 回目にピレスロイド系薬剤(RACコード: 3A)を散布するのが効果的です。

4 炭そ病の防除(小豆)

今年は7月下旬から発生が確認されています。ほ場を良く観察し、発生初期から防除に努めましょう。まだ発生していないほ場では菌核病・灰色かび病の1 回目防除時に炭そ病にも効果のある薬剤選択で同時防除が可能です。

表9 小豆「炭そ病」の防除薬剤例(炭そ病単独で防除する場合)

農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
トップジンM水和剤	1	1,000	14日	4回

※チオファネートメチルを含む他剤との総使用回数に注意。

5 菌核病、灰色かび病の防除(小豆・菜豆)

開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。ほ場の生育に合わせて、適期防除に努めてください。

小豆防除適期 1回目：開花始(平年7/27、本年7/23)後7～10日目
2回目：1回目防除の10日後

菜豆防除適期 2回目：1回目防除の10日後

表10 小豆・菜豆 菌核病、灰色かび病を中心とした防除例

回数	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)	炭そ病
1回目	オルフィンフロアブル※1	7	2,000	7日	3回	—
	または ブロードワン顆粒水和剤※2	1,9	1,000	14日	4回	○
2回目	ファンタジスタ顆粒水和剤	11	2,000	7日	3回	○
3回目	プライア水和剤※3	10,1	1,000	14日	4回	○

※1 「オルフィンフロアブル」は炭そ病に効果がないため、炭そ病発生ほ場では「ブロードワン」を使用するか、「トップジンM水和剤」との併用で対応する。

※2 「ブロードワン顆粒水和剤」はチオファネートメチルを含むので、トップジン M との総使用回数(4回)に注意。

※3 菜豆類は発生の多い場合に3回目検討(インゲンマメゾウムシ対策の「バイスロイド乳剤」2,000倍と同時散布)

6 アブラムシ類・アズキノメイガの防除(小豆)

現在のところアブラムシの寄生株はほとんど見られていませんが、アズキノメイガ等の発生にも注意し、寄生を確認したら直ちに防除しましょう。

* 薬剤は 7/20 付技術情報参照

野菜

十勝管内で軟腐病の発生が多い傾向にあります。引き続き予防的防除を実施してください。また必要に応じて、小麦収穫後のアザミウマ防除も実施してください。

○軟腐病の防除

高温多湿下での銅剤による防除は薬害が心配されます。必要に応じて抗生物質系殺菌剤を使用するなどして防除を実施してください。

※各作物の薬剤については、「令和4年度農作物病害虫防除基準または7月20日付技術情報」を参照。

◎薬剤防除以外の細菌性病害対策

- ・茎葉を傷つける恐れがあるため、手取り除草を控える。
(移植前の葉菜類)
- ・降雨後の停滞水に備えサブソイラ等で排水対策を実施する。

◎銅剤使用時の注意

- ・薬害軽減のため、クレフノン 200 倍を加用し、葉面散布剤との混用避ける。
- ・高温時の使用は避ける。
- ・薬剤投入フィルターを外し、水を入れてから徐々に薬剤を入れる。

○アザミウマ類の防除(たまねぎ、キャベツ、レタス)

小麦収穫に伴い近隣ほ場へのアザミウマ類の侵入が心配されます。たまねぎや葉菜類では小麦収穫直のタイミングで防除を実施してください。

※各作物の薬剤については、「令和4年度農作物病害虫防除基準または7月20日付技術情報」を参照。

<たまねぎ>

(1) 倒伏期～根切りまでの防除

灰色(貯蔵)腐敗病や細菌性病害の被害を防ぐため適期に防除を実施し、被害軽減に努めてください。また、多雨時は根切り7～10 日後の灰色腐敗病の際、通常時のトップジン M 水和剤の代わりに、表1の多雨時薬剤の使用を検討してください。

表1 たまねぎ病害の防除例

使用時期	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	白斑葉枯病	軟腐病	灰色(貯蔵)腐敗病
8月上旬	ベルコートフロアブル	M7	1,000	収穫前日	5回以内	○		○
	コサイド3000	M1	1,000～2,000	—	—		○	
根切り直後	ポリベリン水和剤	M7/19	750～1,000	収穫3日前	5回以内	○		○
	Zボルドー	M1	500	—	—		○	
根切り後7～10日後	通常時 トップジン M 水和剤	1	500～1,000	収穫前日	5回以内			○
	多雨時 薬剤例 ミリオネアフロアブル	7	4,000～8,000	収穫前日	4回以内	○ (4000)		○
	カンタスドライフロアブル	7	1,000～1,500	収穫前日	3回以内	○		○
	パレード20フロアブル	7	2,000～4,000	収穫前日	3回以内	○		○
—	Zボルドー	M1	500	—	—		○	
収穫前日	リベロ水和剤	3	2,000	収穫前日	3回以内	○		○

(2) 根切り作業

根切りの目的は、変形、裂皮、皮ムケ防止や均一な枯葉、着色促進による品質の向上です。適期に根切りを行い、品質低下を防ぎましょう。

○根切り時期の目安

早生品種	倒伏揃後 5～7日
中生品種	倒伏揃後 10～15日

○「倒伏揃」…茎葉が80～90%倒伏した時期。

○土壌が乾燥した晴天日に行う。

○30℃近くの高温日で日差しの強い日は地上に露出した部分(特に球下半分)に日焼けを生じる恐れがあるため、作業を見合わせる。または、夕方以降に作業する。加えて、枕地を手掘りして寄せる場合は、茎葉で球を覆い長期間放置しない。

○降雨により収穫が遅れた場合は、再度根切りを行う。

(3) 収穫作業

収穫の遅れは外観品質低下の原因になります。根切り後は茎葉が枯葉し首部の仕上がりを確認したら早めに収穫を行ってください。

- ・肌腐れ等の障害球が混入しないよう収穫前に除去してください。
- ・タッピングは首部が十分乾燥してから行ってください。
- ・収穫後のコンテナは、搬出しやすい排水良好な場所で風乾してください。

<キャベツ・はくさい>

(1) 害虫の防除

コナガの発生が続いています。アブラムシ、アザミウマ類とともに継続して防除を実施してください。コナガは薬剤抵抗性がつきやすいため、同一系統殺虫剤の連用は避けましょう。

※薬剤については、「令和4年度農作物病害虫防除基準または7月20日付技術情報」を参照。

(2) キャベツの株腐病防除

株腐病は、結球～収穫期の高温・多湿条件下で発生しやすくなります。結球初期から予防的に防除を行い、発病株は早期に抜き取りましょう。

表2 キャベツ株腐病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	注意事項
リゾレックス水和剤	14	500～1,000	収穫7日前	3回以内	—
アミスター20フロアブル	11	2,000	収穫7日前	4回以内	黒斑病に登録あり。

<にんじん>

(1) アブラムシ類の防除

アブラムシが発生しているほ場では、黒葉枯病や軟腐病の防除に合わせて防除してください。

表3 アブラムシの防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
ゲットアウトWDG	3A	3,000	収穫7日前	2回以内
アドマイヤー顆粒水和剤	4A	10,000	収穫3日前	2回以内
マラソン乳剤	1B	2,000～3,000	収穫14日前	4回以内

(2) 追肥

肥料切れは、根部肥大の抑制や黒葉枯病の発生を助長します。必要に応じて追肥を行ってください。

<だいこん>

(1) 軟腐病の防除

特に種後25日頃の防除が重要なため、遅れないように防除を実施してください。

表4 軟腐病の防除例

時期(は種後)	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
25日頃(1回目)	乙ポルドー	M1	500	—	—
32日頃(2回目)	スターナ水和剤	31	1,000	収穫14日前	5回以内

(2) 害虫の防除

必要に応じて、コナガ、アブラムシ等の防除を実施してください。

表5 害虫の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	コナガ	アブラムシ
エルサン乳剤	1B	1,000~2,000	収穫30日前	2回以内	○	○
パダンSG水溶剤	14	1,500	収穫7日前	3回以内	○	○
アグロスリン水和剤	3A	1,000~2,000	収穫7日前	5回以内	○	○
ベネビアOD	28	2,000~4,000	収穫前日	3回以内	○	○ (2,000)
ディアナSC	5	2,500~5,000	収穫前日	2回以内	○	

<レタス>

害虫ではナモグリバエ、アザミウマ、アブラムシなど、病害では軟腐病、腐敗病などが発生しやすい時期です。適期に防除を実施してください。

(1) 害虫の防除

表6 害虫の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数	アブラムシ類	アザミウマ類	ナモグリバエ	ヨウムシ
プレオフロアブル	UN	1,000	収穫7日前	2回以内		○	○	○ (ハスモンヨトウ)
アフーム乳剤	6	1,000~2,000	収穫3日前	3回以内			○	○ (ハスモンヨトウ)
グレーシア乳剤	30	2,000~3,000	収穫3日前	2回以内		○	○	○
ダントツ水溶剤	4A	2,000~4,000	収穫前日	2回以内	○	○ (2,000)	○ (2,000)	

<ながいも>

(1) 緑肥栽培

来年度ながいも作付け予定ほ場で前作が秋まき小麦の場合は、小麦収穫後に緑肥のえん麦野生種を栽培して地力を高め、キタネグサレセンチュウの密度低下を図ってください。

※は種等の詳細は畑作<小麦>(3)収穫跡地の後作緑肥作付参照

(2) トレンチャー溝の陥没

トレンチャー溝の陥没が見られます。放置するとその後の降雨で陥没が拡大しやすくなります。形状悪化の原因になるため、通路の土で埋め戻すようにしてください。

～農薬の安全使用と農作業事故防止～

- ★農薬散布において、「農薬の安全使用基準」を遵守し、散布の高さを低くし周辺作物への飛散防止に努めましょう。
- ★散布時は、必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかり覆うようにしましょう。散布が終わったら肌の露出部を良く洗い、うがいしましょう。
- ★作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。
- ★水分と塩分をしっかりととり、熱中症に注意しましょう。